世の中は意外と魔術で何とかなる

YONONAKAHA IGAITO MAJUTSU DE NANTOKANARU

Monomanenomi
ものまねの実
Illustrator
猫魚かむ

登場人物紹介



テオ
騎士団の
斥候役。

エレイア
騎士団の
女性騎士。

ルドラマ
交易都市
ヘスニルを治める
伯爵。

アンディ
少年になって異世界に
転生した元おっさん。
圧倒的な魔術の
才能を有する。

ギリアム
騎士団の
小隊長。

アデス
ヘスニル地方
騎士団の団長。

第一話　新しい旅

朝が当たり前に来る幸せを毎日神に感謝する人間はどれだけいるだろうか。
夜を無事に迎えられた喜びを噛み締めて眠りにつく人はどんな人だろうか。
命が失われた時、魂はどこへ向かうのだろう。
地獄か天国か、それともただ消えていくだけ？
もし、死を迎えた魂が新しい旅立ちを迎えるとしたら、どんな世界へ送られるのだろう。
今、一つの肉体がその生を終えた。
魂は本来のルールに従い、あるべき形に則り進むはずだった。
神のいたずらか、世界の仕組みの誤動作か。
その魂は予期せぬ運命に直面した。
異なる世界への旅立ちに、感情と知性を表せたらどんな反応をしただろうか。
魂は紡がれ、一本の糸へと形を成す。
辿るべき道を失った運命の糸は手繰り寄せられ、糸車に絡め取られる。
暗闇の中で車輪は回る。
回る、回る。

巡る、巡る、巡る。
長い時を経て、やがて輪が朽ちると糸は消えていた。

星々の輝く真空の世界のただ中にチェス盤があった。
盤上の駒は動かない。
指し手のいない世界は正しく、住人の手に委ねられていた。
導きも救いもない。
牢獄の自由だけが残されていた。

◇　◇　◇

目覚めると、目の前には青空が広がっていた。
本来目覚めると同時に目に入るはずの天井がない。
はて、記憶では最後に寝たのは部屋のベッドの中だったはず。
……いや、なにか記憶がぼやけていて、確かなことは言えない。
身を起こして周囲を見るがまったく見覚えのない場所だ。
「……酷い有様だな。竜巻でも通ったか？」
なにやら木造の建物があったらしい痕跡として、何本かの柱らしき木の棒が所々に見える。

見えるのだが、どれもこれもなかなかデカイ。
俺の身長が百八十センチちょいだから、目の前の柱なんか高さ四メートルくらいあるぞ。
こうしてボケっと座ってても始まらない。
現状の把握のために周囲を散策してみるか。

「ふぅー、ここまでで一周か。意外と広かったな」
とりあえず、辺りをぐるりと見て回り、目についたいい感じの切り株に腰かけて一息ついた。
少し汗ばんだのでタオルでもあれば拭いたかったが、生憎今あるのは身に着けている亜麻に似た肌触りの七分袖・七分丈の上下のみ。
さて、色々見て回ってわかったことをまとめてみよう。
まず、どうやらここは廃村らしい。
なぜそうなったのかはわからない。
残されたものがあまりに少なく、災害でそうなったのか、他の要因だったのかがわかる要素がない。
せめて現在地がわかるものはないかと探し回ったが手掛かりはなし。
学校のグラウンドよりやや広い村で、家屋は十軒かそこいらか。
大概の家屋がなんらかの強い力で薙ぎ払われたようで、屋根が残っている家は三軒ほどだ。

その三軒でまともに壁が残っているのは一軒のみ。
かろうじてその一軒が風雨をしのげる程度に残っているだけという有様だ。
住民は見当たらなかった。
死体や白骨もないので、恐らく全員が避難したのだろう。
食料や衣服などは一切残っていない。
持っていけなかっただろう家具がちょいちょい見つかっただけだ。
もう一つわかったことは、ここは地球じゃないということ。
なぜなら空に浮かぶ月の数が違うからだ。
見える限りでは地球の月よりも一つ多く、二つの月が浮かんでいる。
大きさもこちらの月の方が小さい。
さらにそのうちの一つは穴開きチーズのように外縁部が二カ所欠けている。
地球ではどう見方を変えようがこう見えることはない。
月が自分の知識とは異なる形をしている。
ならば今いるこの地も自分のいた場所とは異なるのではなかろうか。
まさに、ここは小説の中などに出てくるまったく別の世界――異世界と言えるだろう。
そしてもう一つ、俺の体がおかしい。
元々二十二歳の頃から農業を営んでいたため、そこそこ筋肉がついていたし、三十二歳にしては

若く見られていた。
ところが今の俺の身長は百四十センチ程度で、やせ細った手足が衣服から覗いている。
ありえないことに、ガリガリの子供の体になっていたのだ。
そうなると相対的に初めの違和感が解消される。
どうやら周りの建物の残骸がでかいのではなく、俺が縮んでいたようなのだ。
現在の体格的には十歳ほどだろうか。
俺の十歳頃はこんな感じだったなーって思うから、そう判断した。
この事実が判明した時にひどく混乱したが、今はもうだいぶ落ち着いている。
色々考えたが、現在の状況は輪廻転生の結果として受け入れることにした。
とすれば俺は一度死んで、地球以外で生まれ変わったということになる。
他の動物などに生まれる場合もあったはずなので、今生でも人間として生まれて運がよかったといえるか？
しかし、生前の記憶があるとはどういうことなのか。
おまけに赤ん坊ではなく、約十歳からのスタート。
正常な転生がどういうものかはわからんが、この肉体に俺の魂が憑依したようなものだろうか。
とすれば、この体の元の持ち主はどうなったのか。
あーだこーだ考えても答えが出てくるはずもなし。

どう考えても異常な事態であるからには、あるがまま受け入れ、今後のことを考えるべきだ。
現状における必要と不要の選定、優先順位の割り振りを頭の中で行う。
水と食料、体を休める家の三点だけは早急に確保しておきたい。
見て回った限りでは井戸がなかったが、恐らく川が近くにあるはず。
この規模の村なら井戸を掘る手間より近くの川から水を汲む方がよかったのだろうか。
水はそこから手に入れるとして、食料はどうする？
一応村の周りに少し離れて森が広がっているから、そこから食料の調達を考えるのが妥当だ。
森が近いということは、こちらに危害を加える恐れのある獣の対処も考えなくてはならない。
自分の知っている危険な動物の範疇に収まらない、より脅威度の高い生物の存在もあり得る。
それでなくとも今の丸腰の自分は森の生態系の中では最弱に分類されるはずだ。
一刻も早く自衛の手段を用意しなくては。
間に合わせの武器として、石器を括り付けた木の棒を槍として使う手もあるが、ここいらの石の質が加工に向いているとは限らず、楽観的に考えるのは危険だ。
都合よく死んですぐの動物の骨とかないかな？
なんやかんや考えているうちに結構時間が経っていたようで、日が暮れて夜になろうとしていた。
水場の確認をしたいところだが精神的な疲れが出たのか、体が重い。
仕方ない、明日から頑張ろう。

とりあえず見回った時に見つけた、屋根と壁が残った多少程度のいい家を仮の拠点とするか。
屋根があるだけありがたい。壁も穴が開いてるだけで十分残ってる。
今の状況の中で最良だと思いたい。
中に入るととりあえず掃除をする。
これから世話になるのだ、せめて掃除だけでもして少しでも過ごしやすくしたい。
壁の一部だったであろう木片を少しどかして横になるスペースを確保する。
軽く地面を均して横になって寝やすい位置を探す。
柔らかい布団が恋しい。
足を抱え込むように身を丸めてそっと目を瞑る。
それだけで意識が深い闇へと沈んでいった。

小鳥の鳴き声で目が覚めるのは、たとえ世界が異なっていても気持ちがいいのに変わりはない。
目覚めがスッキリだとこれからの活動にも張りが出る、気がする。
昨日行かなかった水場を確認がてら、顔を洗ってこよう。
起き上がり家を出て目星をつけていた場所に向けて歩く。
水は生活に欠かせないため、毎日人が行き交う結果道ができていたのだろう。
村の西側に藪を踏み慣らした細い道があったので、そこを進んでいくとやはり川があった。

川幅は約四メートル、深さは恐らく五十センチほどだろうか。
水は澄んでいて流れも穏やかだ。
川底には小魚が泳いでいる。
捕まえようにも道具がないし、なにより小さ過ぎて満腹になるには何匹必要になることやら。
ともかく顔を洗いさっぱりしたし、喉の渇きも癒やすことができた。
水筒でもあれば水を持ち帰れるのだが。
村をもっとしっかり探せば桶ぐらいはあるかもしれない。
後で探してみよう。
ここで暮らす以上、自分以外誰もいないがゆえの孤独感に襲われることも心配したが、そもそも前世では家族から離れて、人がほとんど来ない山奥でほぼ自給自足の一人暮らしだったのだ。
今更人恋しい気持ちが芽生えることはないだろう。
だが、いずれ生活に余裕ができたらペットを飼うのもいいかもしれない。
ベストなのは犬だが、こんな所に都合よく人になつく動物がいるかは、はなはだ疑問だ。
まずは小動物から始めるべきか。
頭の中で計画を立てていると、盛大に腹の音が鳴った。
そういえば昨日はなにも食べていなかったため、ひどく腹が減っていた。
このまま食料の調達に行こうかと森の方に目を向ける。

果物の一つでも見つかればと思った矢先、少し奥にある茅のような植物に見覚えのある蔓が絡まっている。
蔓についてる葉っぱの形も知ってるものと同じ。
運がいい。恐らく自然薯だろう。
あの蔓をたどった先の地面を掘ればきっとあるはず。
だが自然薯というのは掘り出すのに時間がかかる。
地中に曲がりくねった形で芋がなるので、ただ掘ればいいというものではない。
商品としての価値を損ねないために、なるべく形を保って掘り出すのは手間がかかる。
だが今はとにかく腹が減っていた。
別に売り物にするわけではないので、そこまで神経を使わずにさっさと掘ってしまおう。
途中で折れてしまったとしても食えれば問題ない。
空腹に急かされていざ掘ろうとして困った。
穴を掘る道具がない。
自然薯を掘る際、本来であれば先の細いシャベルを使うのだが、そんな気の利いた道具などここにはない。
手で掘ることもできるが、えらく時間がかかる。
村のどこかにもしかしたら道具があるかもしれないが、一旦帰って、探して、使えるか点検して、

またここに戻ってくる必要がある。
全て順調にいけばいいが、そうもいかないだろう。
もしかしたら掘り出すのは今日中に終わらない可能性もある。
道具がないと時間がかかる。
道具を探してくると時間が足りなくなる。
どっちを選んでも今日中に食べ物を手に入れることはできないだろう。
潔く諦めて他の食べられるものを探しに行くという選択肢もあるが、今目の前に食べ物があるのに、見つかるかもわからない食料を求めて森をさ迷い歩く気になるだろうか。
俺はならない。
仕方ない。
俺は泣く泣く道具を探して戻ってくる道を選択した。
立ち上がる際、悔しさを抑えられず地面にバンバンと両手を叩きつけてしまった。
――この土さえ除ければ手に入ったのにっ！
無念さ、怒り、様々な思いが入り混じり、強い渇望が内から湧き出た瞬間、異変は起きた。
叩きつけた両手を基点に周囲の地面がモコモコと蠢き始めたのだ。
なにか大きな管が地面の下をうねり動いているような……土をひっくり返す意思があるかのようだ。

「なんだ……これ……モグラか!?　にしては規模がでかい……ってか危ねぇっ！」
このまま留まると地面のうねりに飲み込まれるかもしれない。
それでなくとも地面がグネグネと動いているのだ。
そのうち立っていられなくなる恐れもある。
万が一を考え、異変の起こっていない後ろ側に向かって飛びはねて下がった。
ここなら安全だろうと思う場所に立ち、冷静に見られるようになってくると、異変が起きている場所で段々と土の盛り上がりがはっきりとわかるようになってきた。
先ほど手を置いた場所から放射状に地面が掘り返され、土が除けられ、向かって右側がうずたかく盛られていく。
どうやら下の土が右側に寄せられていって、土が小山になっているようだ。
しばらくすると、徐々に土の動きが収まり、目の前には直径五メートルほどの小さなクレーターが出来上がった。
もう落ち着いたのだろうと判断し、穴にそっと近づく。
穴を覗き込むと深さは一メートルってところか。
認めたくないがこの惨状を引き起こしたのは俺だろう。
突然の超常現象に恐怖心や疑問が湧き上がってきたが、それはあまり重要ではなかった。
なぜなら、これによって本来時間がかかるはずだった穴掘りの工程を省き、目当てだった自然薯

を手に入れることができたからだ。
自然薯は穴の中にポツンと残されていた。
所々折れているが、それは仕方のないことだ。
あれだけ土が動いたのだ。
当然の結果だろう。
改めて穴から自然薯を全て回収し、少し離れてから地面に並べてみた。
「……デカくね？　自然薯ってここまで育つものだったか？」
こうしてみると相当太いし重い。
折れる前の長さは一メートルほどはあったようだ。
これはいい。
長い方だが、ありえない長さではない。
だが太さが尋常じゃない。
凸凹（でこぼこ）している分を差し引いても子供の頭ほどの太さがある。
二年や三年の大きさじゃないぞ。
見たことはないが十年物とかの感じっぽい？
これ本当に自然薯か？　食って大丈夫なのか？　とか疑問は色々ある。
だがそういった心配は食いでがありそうな食料の前には些細（ささい）なことだった。

着ていた麻のシャツを脱いで袖を結び、即席の袋として中に収穫物を詰め込む。
三分の二が入ったところで袋はパンパンになってしまい、残ったものは可能な限り手で持っていく。
残りはさっき開いた穴に入れ、周りの土を被（かぶ）せていく。
もしかしたら、しばらく後でまた収穫できるかもしれない。
盛った土の近くに落ちていた目印にできそうないい感じの木の棒を、たった今埋めた穴の上に刺してその場を後にした。
川辺に戻ってくると、まずは芋についた土を洗って落とす。
ついでに自分も川に入って体についた汚れも落とす。
「おほぉー、冷てー。チョー気持ちいいーー」
夏の空気で火照（ほて）った体には冷たい水が気持ちいい。
しばらくして水から上がり、川辺の大きめな石の上に横になり、日差しで体を乾かす。
落ち着いてくると先ほどのことが気になってきた。
土が勝手に横に退（ひ）いていって、自然薯だけが穴の底に残された。
そういう現象が時たま起きる場所なのだろうか。
「いや、ないな。あるはずがない」
あれは俺にとって必要なタイミングで、最良の結果が残された。

つまり俺が無意識に望んだ現象が、なんらかの超常の力によって引き起こされた。
土を掘るという意思をもって、土を除けたいと心の奥で強く望んだから起きたのだとしたら……
あれこれ考えてみたが、やはり答えは出ない。
いや、恐らく答えはもう出ている。
突然、異世界に迷い込み、まったく見知らぬ他人の肉体に魂だけが宿った。
もしこの世界が、自分が知らない、なんらかの能力を日常的に使う世界だったとしたら？
この肉体が元々持っていた能力が、あの土を操る能力なのではないだろうか。
自分の目的を達成するために、意思をもって超常の現象を起こす。
これではまるで『魔法』のようではないか。
いや、もうこれは『魔法』で決まりだろう。
異世界には魔法が存在する。
この一事を思うだけで、なんだか子供の頃に戻ったようにワクワクしてきた。
さらに想像は膨らんでいく。
魔法で世界に覇を唱える？
名を挙げて英雄に成り上がる？
それとも森の賢者として国を導く？
いやいや、そんな大袈裟なことに使うなんてとんでもない。

魔法を上手く使えば今の生活も便利になるのではないか？
今回は土だったが、他に火を出せれば煮炊きに使えるし、水を出せるようになればいちいち川に行かずに済む。
夢が広がってきた。
まずは自分の能力の応用範囲を探ることから始めよう。
なにができて、なにができないのかを見極め、便利な使い方を開発する。
そうと決まればやる気が湧いてきた。
気力も充実してきた気がして体に熱が入ると、催促するように腹の音が鳴った。
「……とりあえず食事にしよう……」
来た時よりポジティブな気持ちが強まり、足取りも軽くなった気がする。
定めた目標が自分の中に落ち着いたところで、入手した食材を抱えて家に帰っていった。

◇　◇　◇

【ＳＩＤＥ：森の強者】
夏も盛りを過ぎ、日差しを遮る木々の間を涼しい風が通るようになってきた。
四季のうち、最も生命力溢れる夏は森の生命を育み、また多くの生命が淘汰されていく。
来る秋に備えて、装いを整えようとし始めているはずの森は今、不自然なほどに静かだった。

一切の生命が息を潜めて、嵐が過ぎ去るのを待っているような、暗い静寂が漂っていた。
そんな森の中を一匹の獣が歩いている。
見た目は巨大な猪だが後ろの足で立って歩き、前腕が四本ある姿はまさしく異形と言っていいだろう。
三メートルを超える身の丈により発生する足音は、姿を見ずとも重量感を伝え、その威容の一端を想像させるだろう。
細い獣道を歩くには体が大き過ぎるため、四本の腕を使い、藪を掻き分け、枝を払い進む。
通常、動物は音を立てるのを嫌い、自分の痕跡を辿られないようにすべきと本能でわかっているため、騒音を立てて歩くことはありえない。
しかし、獣はそんなことなど関係ないとばかりに、愚直に僅かに道らしい道をひた進む。
その獣はこの森で強者だった。
自分と似た姿をした動物もいたが、手足は合わせて四本しかないし、体も小さかった。
なにより二本足で立ち、腕を自由に使えるのは自分だけで、それは闘争においてなによりも武器になった。
牙を突き立てるより、手で掴み力ずくで引き裂くことで多くの敵を圧倒してきた。
縄張りを広げる闘いの日々を送るうちに、気付けば自分に立ち向かう敵はいなくなった。
結果、周りは全て捕食対象になり下がった。

今日も目に付くものから食ってやろうと周りを見渡し、森を歩き回る。
いつもなら自分が歩き回るだけで、藪から飛び出し逃げ惑う獲物を追い回し、食いたいだけ喰らうのだが、一向に獲物に遭遇しない。
本来ならば縄張りのうちを探すのだが、まったくと言っていいほど獲物に出会わない。
そうなると縄張りの外へ足を向けるしかない。
マーキングの匂いを感じられるまでの距離を限界とし、それでも獲物に遭えなければ引き返すつもりだった。
探し始めてだいぶ経ったが、未だ獲物は見つからない。
どれだけ強者として力があろうと、そもそも獲物に遭遇しなければその力を発揮できない。
イライラが溜まり、今日は塒に戻ろうかと思い足を止めたその時。
自分以外の匂いを感じた。
獲物だろうか。
いや、関係ない。
今はとにかくなんでもいいからイライラをぶつける対象が欲しかった。
精々いたぶってやって、迫りくる死の予感に絶望したところで一息に殺し、喰らってやろう。
残虐な思考に染まり始め、匂いの場所を捉え、一足飛びでかかろうと足を撓め、力の解放を待つ。
向こうもこちらに気付いているはず。

反撃の隙も与えず、初撃で戦意を奪う。
いざ飛びかかる、まさにその時だった。
パンっと軽い音が鳴った瞬間、獣はその生涯を終えた。

◇　◇　◇

目の前には三メートル超えの巨体が痙攣しながら倒れている。
殺傷方法のせいで筋肉が痙攣しているが、既に命はないだろう。
山菜を取っている最中に、突然襲い掛かられそうになったので、咄嗟に強めに電撃を放って仕留めた。
仕留めたはいいが、あまりのデカさに驚愕する。
「ふぅー、びっくりした。思わず殺っちまったが……。なんだこいつ、猪……で合ってるのか？」
普段遭遇する猪は精々が一メートル、でかくても二メートルはいかない大きさがほとんどだ。
それが、目の前には三メートルを優に超える巨体が転がっている。
毛の一本一本が針金並みに太く、触ると刺さるように硬い。
まず湧き上がった疑問としては、これは食べられるのだろうか？　ということ。
パッと見て腕は多いが猪の姿をしているので問題ないと思い込み、貴重なたんぱく源として頂こう。

最近は鳥か兎ばっかりだったから、久しぶりの大物に心が沸き立つ。
血抜きをして解体する必要があるので、とりあえず場所を移すことにする。
森の浅い所だとはいえ匂いを嗅ぎつけて、他の動物が寄ってくると面倒だ。
巨体を担ぎ、速足で森を抜ける。
三メートルの巨体を小柄な少年が軽々担いで歩く姿は、普通の人間が見たら驚愕で目を見開くことだろう。
推定三百キロ近いものを担ぎながら、重さをまるで感じさせない足取りで歩いているが、これには秘密がある。
体の内側から支える感じで魔法の力、魔力を血流のイメージで循環させると体が頑丈になり、力が増すというのを発見した。
便宜上、強化魔法と名付けている。
重いものを持ち上げたり、速く走ったり、高く跳ねたりといった身体能力の大幅な向上が発現した。
これを使うことで三百キロ近い重さも、体感的には五キロの重りを持っている程度にしか感じなくなる。
おかげでこうして狩りの獲物を持ち運ぶのに非常に重宝している。
あの穴掘り事件から既に一カ月ほどが経つ。

あれから魔法の研究と活用に重点を置いて生活を送ってきた。
様々試したが、俺に使えたのは土、水、雷の三系統の魔法だけだった。
土魔法はあれから試行錯誤を繰り返した結果、大分上達し、初めは土を盛り上げたり穴をあけたりぐらいしかできなかったが、今では一息に土の小屋を作り出すことができるまでになった。
簡素化したものであればある程度形に融通が利くので、森での休憩の際に役立っている。
水魔法は水自体を生み出すのに苦労するが、空気中の水分を集めるというやり方を意識することで、魔力の消費を抑えて使うことができたのがよかった。
どうも水魔法は水を生み出すより、その場に存在する水を操るというのが本来のやり方なんじゃないだろうか。
そうする方が断然楽だし、魔力の消費もグッと少ない。
近頃は川のすぐ横に穴を作って水を引き込み、中の水の流れを操って渦を作り出し、洗濯機のように使って服を洗っている。
今のところは水を生み出すには魔力の消費が激しいせいで、飲用など料理に使う水は川から汲んでくることにしている。
……その方が健康にいいし。
飲み水を魔法で簡単に作れないことは全然残念じゃないし。
……ほんとだよ？

雷魔法に関しては、火を使おうとしたら、雷の方が出てきたという感じだ。
前に焚き火を起こそうと小枝への着火を試したのだが、一向に火が出てこない。
早い段階で気付いてはいたが、どうやら火魔法は俺には使えないようだった。
それでも火種だけは用意したいので、しつこく試していたら、突然指先から放電が始まって、それがきっかけで小枝に火がついて燃え始めた。
想定とは違ったが結果オーライだ。
便利なのでこのまま放電式着火のやり方で今までやっている。
強めに力を込めて使うと、さっきの化け猪のように大概の生き物なら一発ＫＯできる。
今はもっと強力な攻撃方法に使えないか研究中だ。
ゆくゆくはレールガン的な使い方もしていきたい。
ロマンが溢れて止まない。
俺が使える三つの魔法をゲーム的に考えるなら、属性というものになるのだろう。
思うにこれらの属性が使えるのは、前世で深く関わったものに起因するのではないか？
土は農家だったから身近にあったし、いつもいじっていたから馴染みがあった。
雷は電気製品に囲まれた生活を送っていたからだ、と無理やりに思うことにしている。
水は……まあこれも現代日本ではふんだんに使えていたから、とこれも無理やり感はあるがそういうことにしておこう。



……やっぱり土以外は関係ないのか？

いやいや、水も電気も一般の科学知識で発生や効果のメカニズムはわかるのだから、関係ないこともないはず。

まあ、魔法などという今まで存在を肌で知らなかったものの考察を始めるときりがないので、今はこれ以上深く考えるのはよそう。

ラノベなんかでも設定を詰め込み過ぎると話がくどくなるしな。

考えながら歩いていると、すぐに家の前へと着く。

初めてこの世界に来てから、この村も随分手を入れてある。

村の周りは土魔法を使い、高さ二メートルほどの塀で囲っている。

獣の侵入を恐れて、厚さは一メートルほどにし、塀の上には木の枝で外に向かって返しを作ってある。

この塀の作製には、毎日コツコツと寝る前に残った魔力をつぎ込んで、約二週間かかった。

門の部分は出入りを考え、横倒しにした丸太を四本積んで、真ん中辺りをギザギザに切り、地面に突き刺した二本の丸太を門柱として植物の蔓を何十本も使って結び付け、外に向けて観音開きになるようにした。

素人大工なので、見栄えはよくないが門としての機能は満たしているので概ね満足している。

そこを素通りして、塀をグルリと回り込んで門とは正反対の場所に向かう。

ここには裏門を作っている。
正門に比べると小さいが、それでも大型の獲物を抱えたままで通れるだけの余裕はある。
いちいち開けるのに大袈裟になる正門より、裏門を使った方が楽だし早い。
寝泊まりに使っている家は新しく土魔法で建てた。
イメージは日本昔話に出てくる、昔ながらの家だ。
土間が四畳、上がった先が二十畳くらいと結構広めに作った。
もちろん、囲炉裏も備えている。
障子が似合うと思うのだが、残念ながら用意できそうにないので木の板で代用した。
南向きの板戸を引き開け、全て開放すると縁側もあり、気持ちのいい風が部屋を渡る。
壁は土でできているが、一応茎のしっかりとした植物を混ぜ込んだ土を土魔法で壁に成形しているのでそう簡単に崩れたりはしないはず。
当然作り方などわからなかったので、手探りの連続だった。
魔法で建てたといっても全部土でできているわけではなく、石も組み合わせている。
基礎には大きめの石を何個か集めて使っているし、柱は木材を石で補強したものを苦労して作った。
さすがに屋根は自分で一から作るしかなく、バナナの葉のようなデカイ葉っぱを見つけたので、それを何十枚と集めて屋根に重ねて敷き、その上からこれまた森で見つけた茅のような植物を向きを揃えて重ねていき、茅葺屋根風に仕立てた。
雨漏りの実験として屋根から水を流してみたが、漏れもなく実用に堪えると判断した。
かつて残っていた家屋の残骸は、もうほとんど存在しない。
目ぼしいものは俺の住んでいる家の材料として流用したし、それ以外の細かいものは少しずつ焚き火の燃料にしていったので、今では初日に眠った時に使った家が残ってるくらいだ。
これもやがては解体し、薪として使っていくだろう。
まあ、今は森から木を調達しているから、しばらくはそのままだが。
今の家の前には広場のように開けた場所ができている。
土魔法で地面を一段高く均して水はけも考えてある。
石を組んだ竈のようなものや、三本の細い丸太を三角錐状に組んで頂点から蔓を垂らし、そこに獲物を吊り下げて血抜きをするためのものなどがあちこちに存在している。
竈は平たい石を積み、間を粘土っぽい土で埋め、竈の中で火を焚いて焼成の工程をそれっぽくやることで、中々いい具合に出来上がった。
一度側面に罅が入ったが、作った時と同じ粘土質の土と細かい砂利を混ぜ込んだ、似非コンクリートのようなものを塗り込んで補修した。
今のところ他に問題は起きていない。
煮炊きをするにはこんなもので十分なのだ。

普段は採ってきた食料の調理や日用雑貨の作製、魔法の訓練をしたりと日中の時間のほとんどをここで過ごしている。

廃村になったこの場所で必要な道具類がそうそう手に入るはずもなく、ないなら作るしかないと木で大概の道具を賄っている。

嬉しい誤算だったのは、土魔法で土中から金属を抽出し、雷魔法でほぼイメージ通りに変形と生成ができることだ。

これで食器や単純な刃物なども作れるようになった。

ナイフにシャベル、手斧の刃や釘、針など、品質はともかくとして多くの鉄製品は生活をどんどん便利にしていった。

とはいえ、魔力の消費がとんでもなく激しいので、そうポンポンと作れないのが惜しい。

今日は肉が手に入ったので早速解体に移る。

しかし、相当の巨体のために血抜き用の木組みの吊り下げ台に収まらない。

仕方なく、吊り下げ台の下の穴を深く掘り下げ、手足を蔓でまとめて吊り下げた。

大きさが大きさなので時間が掛かるだろう。

その間に火を熾し、少しだが手に入った山菜の灰汁取りにかかる。

鍋は土鍋っぽいのがある。

これも魔法で作製した。

正直、土鍋の材料がなんなのかわからなかったので、とにかく色々な土を集めて、成型しては焼いての繰り返しでようやく満足のいくものができた。

一度雷魔法を使って電気炉の要領で一気に温度を上げて焼いたらどうかと思い実行したが、途中までいい感じで進行して鍋が爆発した。

あまりにも驚いて漏らしてしまった。

横着はいかんということを学んだ。

素直に焚き火の火でじっくり焼いてゆっくり冷やす、これに尽きる。

沸いた大量のお湯に塩を溶かし、山菜を入れて湯がいて、水にさらす。

さらにそのまま一時間寝かす。

この山菜はこれで灰汁が結構抜ける。

何度か試して辿り着いた調理法だ。

多少灰汁が残るがこれも味の一つとして受け入れている。

これに塩をつけて食べるだけ。

単純だがこれが旨い。

ちなみに今手元にある塩だが、以前鹿っぽい動物の群れの後をつけていったら、崖の斜面の土を動物たちが食っている光景に出くわした。

動物たちが去った後に調べてみると、土に多量の塩分が含まれているのがわかり、この土を持ち

帰り、塩分の抽出を試みて、四苦八苦しながらゲットした。
その日の食事はいつもの何倍も旨かったのを覚えている。
後になって土魔法で簡単に塩だけ抽出できたことで、膝から崩れ落ちたが。
それはともかく、血抜きを終えたら毛皮と肉に分けて、内臓は今日のうちに食べてしまおう。
柑橘系の香りのするハーブと一緒に煮込んでもつ鍋にするのもいいかもしれない。
毛皮は皮に付いている脂肪などの余分なものを刃物で少しずつ削り、叩いて揉んでを繰り返して
と快適に使えるようになるのに時間が掛かる。
冬に向けて必要になるのだし、これは丁寧に取り掛かりたい。
そう思い最低出力の雷魔法を手の平に纏わせて、毛皮の表面を撫でていく。
こうすると毛皮を傷めずにノミを駆除できるのだ。
今まで二匹の鹿っぽい生き物の毛皮で試したが、効果は抜群だ。
肉は今日の分を取り分けて、残りは干し肉に加工だな。
塩を大量に使ってしまうが、せっかくの肉を腐らせるわけにもいかないだろう。
明日は塩の補充に出かけることにしよう。
あと解体中に見つけたが、心臓の近くに五百円玉くらいの大きさの、丸くて赤い石が癒着していた
んだが、これなんだろ？
ちょっと綺麗だから取っとくか。

なんだかんだこの世界の暮らしに順応していく中で、この世界で生きて死んでいくことを受け入れてしまい、いまでは前世のことを思い出して落ち込む時間はほとんどなくなっている。
それでも便利な暮らしを知っている身では今の生活に到底満足はできない。
自給自足にも限界があるし、いずれは外との交流も考えなくてはならない。
そうなった時、貨幣を持たない俺は物々交換をする羽目になるだろうから、今から金目の物を探すか作るかしないといけない。
まずは交流の第一歩として、こちらの意思を相手に伝える必要がある。
となるとあれが必要だな。
材料と作り方など、それを考えるだけで夜は更けていく。

第二話　三人が行く

アシャドル王国の南部最大の交易都市ヘスニル。
そのヘスニルの東に広がる森の近くに、小さな村がある。
森とヘスニルとの間に挟まれた村の名前はモトックといい、農業と林業の二つが主な産業だ。
この村の近くに広がる森はどういうわけか、ゴブリンやコボルトといった、通常の森では必ず存在する魔物の類いが見られることがない。

村の老人の言葉では、森の主が一切の魔物を許さず、森の中を見回っていて、魔物を駆逐していったそうだ。

この話を信じるかどうかは別として、実際に森で魔物を見ることがないのは事実である。

稀にどこからか流れ込んで来るのか、少数の魔物を見たという人間もいるが、その後しばらくするとその魔物を見かけることはなくなる。

魔物が存在しない森の林業は、一気に村の主要産業へと押し上げられた。

広大な森の木は質が良く、他の地域のものに比べて加工がしやすく、加工後の乾燥による変形が非常に小さく抑えられるため、大工や細工師からの評価が高い。

そのため、木材の確保を目的に村人が日常的に森に分け入り、木は伐採・加工され、村の外へと次々と売られていく。

ここから出ていった木材は、国内の各地で消費されていく。

まさに森の恵みに生かされている村といったところか。

この営みはもう何十年も繰り返されているものだ。

そんな村である日、一人の木こりが作業中、行方不明になる。

この村では年に何度か、森の中で作業をしている人間が迷ってしまって、捜索隊が組織されることがある。

大抵は森を熟知した村人たちによって助け出されるのだが、中には運悪く、森の動物に襲われた

り、崖や川に落ちたりなどして命を失うこともある。

この時も最悪の状況を考えつつも、すぐに見つかるだろうという、ある種楽観的な考えであった。

だがこの考えは脆くも崩れ去る。

捜索を開始して間もなく、森の中に断末魔の絶叫が響き渡った。

捜索隊の誰かがなにかに襲われたのだろうと判断し、声のあった場所に全員が集まってきた。

人数が揃えば狼程度であればすぐさま撃退できると思っていた。

だがそこにいたのは、濃密な死の匂いに彩られた恐怖をその身に纏う、一匹の獣だった。

食い千切られた何人かの体の一部が散らばっており、その中心で巨大な獣がまさに今、捜索隊の村人だったものを咀嚼している。

長年森で暮らしてきた村人たちには、それがただの獣ではないことが理解できた。

森の他の動物に比べて巨大な体に、通常はありえない明らかな異形。

それは『魔物』と呼ばれる、あらゆる生物の天敵だった。

そこに集まった村人たちは、声を発することもできず、ただ目の前の光景を見続けることしかできなかった。

声を出せば、あの魔物が食っている人だったものが、未来の自分になってしまう気がしていたから。

咀嚼音が唐突に鳴りやんだ瞬間、その場にいた人間は一人の例外もなく身を翻し、一目散に逃

げだした。
食事が終わったらその牙の向く先は次の獲物だ。
自分が捕食される恐怖に追い立てられ、体中からあらゆる体液を撒き散らしながらひたすら駆け抜けた。
遠くで誰かの悲鳴が響く。
運悪く魔物に追いつかれて食いつかれたのだろう。
犠牲になった者への悲哀の気持ちとともに、自分とは別の方向に魔物が行ったということに安心する気持ちもあった。
村の入り口へと命からがら帰ってきた捜索隊の人数は、半分以下に減っていた。
すぐさま村の住人を集めた話し合いが開かれ、生き残った者たちの話をまとめたところ、冒険者組合への依頼を飛び越して、騎士団へ救援要請をという結論になった。
通常、魔物の対処で騎士団がすぐに動くことはない。
しかし、村人に少なくない犠牲が出ていることに加え、モトック村の経済への影響を考えると、騎士団による早期の解決が望ましいと判断が下された。
こうしてヘスニルに駐在する騎士団に連絡が行き、モトック村の要請は異例の速さで受理された。
ただちにモトック村へとヘスニル騎士団第二中隊、総勢十六名の騎士が派遣された。
森の危険度を鑑み、村側に仮設の防護柵を配置し、森の入り口を封鎖し、出入り禁止にしている。

そのため、今のところ犠牲者は先の捜索隊以降は確認できていない。
なお調査に際し、聞き取りを行った村人の話では、魔物の姿は三メートルを超える巨体に四本腕を持ち、二足歩行する猪のような魔物だということだった。

◇　◇　◇

【ＳＩＤＥ：ギリアム・スーラウス】
俺は今、交易都市ヘスニルの東に広がる森の中にいる。
木々に囲まれた中で、ポッカリと開いた広場のような場所で木に背を預けて立っていた。
自分を含めて三名の騎士が、森の中を徒歩で探索している。
森の木々に邪魔されて馬が使えない以上、斥候役の騎士を含めた三名という人数が効率的に活動できる構成だ。
モトック村から救援要請があってすぐに、調査隊の選抜が行われた。
まず先遣調査隊として二名の騎士を派遣。
その後、本隊との合流で人数を五名に増やすため、第二陣に騎士三名の派遣が決定された。
俺が入ったのは先遣隊との合流を目指す、調査隊の第二陣だ。
小隊員は俺の他に、テオという斥候役の男とエレイア・アテックスという女性騎士の三名で構成される。

テオは俺が冒険者から引き抜いた連中の一人で、斥候としての能力は団の中でも随一だ。
一応俺の部下という立場だが、その能力の高さゆえに、時々他の隊に手伝いに行かせている。
百五十センチほどの細身の体はどんな場所でも入り込めるため、木々の密集した森で身軽に移動でき、斥候として適している。
調査任務においては、俺たちの中でも最も重要な役どころであるため、場合によっては誰よりも生存が優先される立場にある。
茶色の長髪は軽薄そうな印象を与えるが、見た目に反せず軽薄な男で間違いない。
女癖は悪く、情には厚いため、娼館ではよくカモられている。
本人はそれに気付いているが、特に不満はないらしく、毎回収入の大半をつぎ込んでしまい、よく俺に金を借りに来ていた。
そんな軽い性格と相まってだらしない生活を送っているため、しばしば騎士としての品格について同僚に説教されているが、本人はどこ吹く風で、直す気はないらしい。
唯一、自身の低い身長を気にしていて、そのことをイジると途端にへこんでしまい、しばらくは使い物にならなくなるため、団の中ではそのことには触れないようにしている。
エレイアは騎士団員と憲兵隊員を兼務しており、腕前と見た目の良さでよく話題に上がるため、団の中では目立っていた。
銀髪を肩口で切り揃え、百七十センチを少し超える長身はよく鍛えられ、一見華奢に見える体は

引き締まった筋肉が覆っている。
それでいて女性特有の柔らかい曲線は失われていないのだから、他の女性団員から羨望の眼差しを注がれることも少なくない。
女性ながら、剣の腕は我が騎士団の中では団長に次ぐほどの実力者だ。
にもかかわらず、一騎士のままで、小隊を任されることもなく、憲兵隊副官補佐に収まっている。
エレイアは特に気にしていないのだが、団の中では彼女の実力と階級が釣り合っていないことが度々議題に上がるも、残念ながら彼女の実家が騎士爵しか持たないため、今以上に出世するにはよっぽどの活躍をするしかない。
剣の腕前はもちろん選考基準としては重要だったが、なにかしらの活躍の機会を与えようという、そんな思惑も絡まって今回の調査に推された形になる。
そして俺、ギリアム・スーラウスがこの小隊の指揮官だ。
剣の腕はそこそこ自信があったし、一時期は冒険者として活動していたこともあったため、斥候職には及ばないが探査能力もそこそこある。
小隊指揮官の中で戦闘と探査をある一定の水準でこなせる者を隊長に据えたかったのだろう。
確かにその選考基準では俺が選ばれるだろうとは思う。
いや、どう考えても俺しかいないな。
幸い男爵家の三男の身、今更いなくなっても実家に面倒は掛からないだろう。

なにも憂いはない身である。
初めは厄介な任務を任されたと思っていたが、人員構成を見たところ、騎士団の本気さが窺え、任務の重要性を理解したため、今ではやる気で満ちている。
この三名が最少人数で最大効率を発揮できる組み合わせだった。
目的は魔物と思しき目標の情報収集と先遣調査団員の救助だ。
だが後者はもう絶望的だと見ている。
なにしろ時間が経ち過ぎているからだ。
騎士団の上層部も生存はほぼ諦めているが、遺体の一部だけでも持ち帰ってもらいたいと、暗にそう仄めかされた。
最初の調査には騎士二名が送られた。
熟練の騎士と魔術が得意な若手騎士の組み合わせで、不測の事態にも対応が取りやすいはずだった。
万一魔物と遭遇、戦闘に陥ったとしても、十分逃げ切れるだけの能力を持っていた。
最悪、どちらかでも戻ってくれれば、情報が手に入る。
そうすれば脅威度の設定ができ、他領に救助の要請も出せる。
とにかく情報とともに帰還するのを待ち続けた。
だが終ぞ、待ちわびた帰還がなされることはなかった。

先遣の騎士の実力を知っているからこそ、今回の魔物の脅威は一体どれほどなのか？　あるいは魔物以外のなにかによって調査を阻害されたのか？　考える限りの安全策が有効に働くかはわからないし、でき得る限りに備えるときりがない。
想像だけで脅威を強大化するのはよくないのだが、過小評価で油断するよりはましだ。
今回は魔物自体の討伐は任務に含まれていないが、それでも戦闘を視野に入れるべきだ。
いざとなったら撤退となるが、できるなら部下だけは無事に帰したい。
最悪の事態が起こることも覚悟しておくしかない。

「……いちょう、隊長、ギリアム隊長！」
「っと、なんだエレイア、問題発生か？」
考え事に集中し過ぎていたようだ。
部下のエレイアに声を掛けられて、意識を研ぎ澄ませる。
少し無防備だったか、組んでいた腕を解き、腰の長剣の柄に手を這わせ、いつでも抜けるように備える。
「違います、テオが戻ってきました。どうしたんです？　ぼうっとして。なにか心配事でも？」
そう言ってこちらを心配げに見つめる。
思ったより長い時間考え事をしていたらしい。

部下に心配させるとは、隊を預かる者としてはこれではいかんな。
「いや、なんでもない。テオはどこだ。報告を聞こう」
そう言ってエレイアに案内を促すと、目線を前方の藪に向ける。
藪の中からツヤ消しの施された革鎧を着た、小柄な男が出てくる。
音をほとんど出さずに草の茂った道を歩くのは、斥候としての能力の高さゆえか。
こちらに近づいてくるテオの顔を見るが、なにやら妙な表情が張り付いている。
困惑しているような、驚いているような、そんな顔を浮かべるなにかがあったのだろうか。
いい報告が聞けるといいんだが。
「まずは無事に戻ってなによりだ、テオ。報告を聞かせてくれ」
そう言って話を促すと、表情を改め、順番に説明しだした。
「了解っす。まず水ですが、近くに川や泉といったものは確認できなかったっすね。昔川があったらしい痕跡は見つけましたけど、もう随分前に涸れたみたいで、水場の方向を探ることもできそうにないですね」
そう言って眉を寄せて悪い報告をしながら、苦しそうに息を吐く。
現在、我々には各人が持っている水袋の水しかない。
夏も終わりに差し掛かっているとはいえ、まだ暑い中の移動で水の消費を抑えるのは容易ではない。

そのため、水場のある場所を地図で確認しながら進むのだが、どれだけ探しても川どころか水溜まりにすら出合わない。
行軍訓練を行う騎士が地図を見間違えることなどありえない。
ならば考えられるのは、地図が間違っているか、水場が消えているかのどちらかだ。
「そうか……。参ったな、このままじゃ明日の分の水を確保できないな。エレイア、水を節約して進むとして、どれくらいもつ？」
「今以上に節約するんですか？　したとしても明日分も残ってませんよ」
そう言って腰に括り付けてある水袋を軽く上げ下げするが、返ってきた音から中身は半分も入っていないだろうとわかる。
このまま明日いっぱい移動して水場が見つかる可能性にかけるか、引き返して装備の更新をしてから再度調査に臨むか、選択を迫られる。
「それと、妙なものを見つけました。いや妙っていうかなんつーか、とりあえず俺一人じゃ判断できないんでほっといて一旦戻ってきたんですけど」
テオの口からなんとも歯切れ悪く言葉が出てきた。
斥候として情報を持ち帰ってきたのなら余すことなく報告するのだが、口籠もるということはよほど酷いものか、あるいは本当に理解できないなにかがあったということだ。
「判断できないって……なにを見たのよ？」

エレイアはそう言ってテオに先を促すが、テオはどう説明したらいいのか悩んでいるようで、しきりに唸っている。
「どうやら説明し辛いもののようだな。危険はないんだろう？　なら見て判断するしかない。案内してくれ」
そう言って先導するテオについていく。
エレイアを間に俺は後ろの警戒をしながら、目的の場所に向かっていった。
しばらく歩くと、なるほど、テオの言っていた妙なものがわかってきた。
森の真ん中にポツンと明らかに人工物と思しきものが存在していたのだ。
一本の木の棒が地面に突き刺さっており、棒の先端に板が面をこちらに向けて張り付けてある。
板の形はそれ自体が矢印になっており、向かって左側を指している。
間違いない、これは立て札だ。
それもつい最近作られたものだろう。
板の断面がまだ新しい。
見ると、文字ではなく絵が描かれている。
馬らしき絵と、それに引かれる箱、恐らく馬車のことを簡易的に書いているのだろう。
その下に丸を三つ並べて、×を上書きして、その隣には折り畳まれた布だろうか？　それを二つ離して書き、矢印で互いを指している。

「なんなんすかねぇ、これ。文字はなくて絵だけって。誰がなんの目的で、こんな人も来ない森のど真ん中に立てたのやら」
そう言ってテオは立て札を手の甲でコンコンと叩く。
「誰がってのは私にはわかるわよ？　ほらこの立て札の高さを見て。私の胸の辺りしかないでしょ？　きっとハーフリングが仲間に向けて立てたのね。この絵は仲間内だけでわかる印だったのよ」
そういって自慢げに胸を張って説明するが、テオから厳しい言葉が飛ぶ。
「馬鹿言え、ハーフリングがこんなとこにいるかよ。こんなとこでうろちょろしてたらすぐに他の動物に襲われちまうっての」
確かにハーフリングは安全な場所を離れないで生活を送る。
戦闘能力も低く、手先の器用さのおかげで仕事に困らない街中を離れて、危険な森の中で暮らすはずもない。
「じゃあこれを作ったのって誰なのよ。ハーフリングじゃないとしたら子供ぐらいの大きさの誰かってこと？　それともわざと小さく作ったとか言わないでしょうね。立て札よ？　これだと目立たないじゃない」
自分の意見が即座に否定されて、少し不機嫌になりながらそう返す。
確かにエレイアの意見に同感だ。

二人は気付いていないがあの絵が俺の推測通りなら、この立て札の矢印の先には人がいるはずだ。
よく見ると、地面が少し踏み均されており、細い道のようなものができていた。
獣道とは明らかに違う証拠に、道の先の藪が刃物で切り払われているようだ。
「二人とも、そこまでだ。お前たちの意見も聞いたし、次は俺の意見を聞いてくれ」
あーでもないこーでもないとやりあう二人を制止して、今わかったことを説明する。
立て札の形状から判断して、人の手の入った道の先に何者かがいて、そしてこちらとの交流を求めている、と。
あくまで俺の推測でしかないが、自信はある。
そう説明するとエレイアが挙手をして質問をする。
「隊長、どうして交流を求めていると判断したんです？　立て札にはなにも文字は書いてありませんが。頭の悪いテオならともかく、私でも読み取れないなにかが隠されていたということですか？」
「頭が悪いは余計だ。お前も俺と大して変わらねーだろうが」
そういって目線で火花を散らし合う二人。
まったく、こいつらときたら……。
普段は意思の疎通も上手くやれるのに、ちょっとしたことで張り合うのがこいつらの悪い癖だ。
立て札の前に立ち、一つ一つ絵を指さし説明をしていく。
絵の見方は一度わかれば後は単純だ。

馬車の絵は商人を意味しているのだろう。
その下の丸い輪三つは恐らく貨幣、布は商品、矢印は交換の意思と理解した。
「……つまりこれを繋げて読むと、『商品を持っていたら物々交換をしよう』と言っているのではないか、とな。まあ、あくまで俺の推測に過ぎない。まったく違う可能性がないこともないが、単純な絵でこれ以上を推し量れってのは無理な話だ」
そういって二人を見ると、ポカンとした顔を浮かべ、やがて感心した表情に変わっていった。
「さすが隊長ですね、これだけの情報でそこまでわかりますか」
「いやーほんとそうっすよ。やっぱり隊長は着眼点が違いますね。エレイアとは大違い」
そう言ってまた睨み合う。
「ほら、じゃれてないで行くぞ。ここからどれくらいの距離になるかわからないんだ。明るいうちに先に進むぞ」
そういって返事を待たずに矢印の方向へと歩き出す。
後ろから慌てて出された了解の返事を聞きながら、行く先のことに考えを向ける。
物々交換を望んでいるくらいだ。
会って早々、攻撃を受けることはないと思いたい。
だがなにがあるかわからないため、不測の事態にはいつでも対応できるようにしておかなくてはな。

歩き始めて大分経ち、木々の隙間から見える空の色も赤が滲み始めている。
森の中なので夕方に入り始めた時点で、暗さが気になり出していた。
件の立て札のあった場所を発ったのは昼を大分回った頃だったはずだから、二刻弱は歩いてきた計算になるか。
あれから人の手の入った道を何度か通ったが、最初の立て札以降、人工物には出合っていない。
前を行く二人の背中からは焦りや疲労といったものは感じられないが、なまじ目的地があるだけに、どれくらい先なのかわからないまま歩くのは精神的にくるものがある。
不意に先頭を歩くテオが足を止め、右手を握ったまま頭の高さまで上げる停止の合図を出す。
なにか異常を発見したのだろうか。
しばらくテオの挙動を注視していると、こちらを振り向き手招きした。
危険はないようで、そのまま進み、エレイアと一緒にテオの横に並ぶ。
それを待って、テオが口を開く。
「隊長、あそこを見てください。どうみても塀としか思えないんですが、その塀に矢印があるのがわかりますか？」
見ると確かに少し先の森の切れ間から、土でできたと思われる塀が垣間見える。
その塀の壁に矢印が刻み込まれており、右側に向かって矢印が連続している。

随分立派な造りの塀だが、森の中で安全な居住地を確保するためのものとして十分納得できる。
近づいていき、左右に広がっている塀を見るとかなりの長さで、恐らくぐるりと囲んでいるであろう中の広さから、そこそこの大きさの村だと予想される。
「確かに矢印が続いているな。それに、かなり立派な造りの塀だ。エレイア、この場所に村はあったか？　それとテオ、明かりを用意してくれ」
そう言ってエレイアに地図を取り出させ、夕方の森の暗さが気になったため、テオにはランプの準備をさせる。
しばらくすると明かりが灯され、三人で地図を囲んでこの場所の目星をつける。
「ちょっと待ってください。……これですかね？　ここ、冬の狩りの拠点だったみたいですよ。でも三年前に放棄されてますから、今は無人ですね」
エレイアはそう言って地図の隅の走り書きを指さし説明をする。
モトック村の住人から聞き取った情報も追記してある地図だけに、情報の信頼性は高いはず。
冬の狩りにしか使わない村にこれだけの塀を作るとは随分と豪勢な話だな。
森の中にある安全地帯として最上の拠点にできるだろう。
「……おかしいな、それだとさっきの立て札の説明がつかねぇぞ。隊長の話じゃ立ててまだ日が浅いって話だったろ」
テオの言葉にエレイアも頷いている。

そう、さっきの立て札は最近立てられたものだ。
この村に人がいなくなってから、三年経っているはずなので、それを行える人間は存在しない。
とすれば、この村に新しい住人ができたことになる。
とりあえず、矢印に沿って進んでみた。
一度角を曲がったところで、塀の中間地点に門と思える切れ間が見えた。
近づくと、確かに門だった。
丸太で組まれた簡素な門だが、幅は馬車が余裕で通れる広さだ。
今は閉じられているが、両開きする型か。
中々頑丈そうだ。
開門させるための声をかける必要があるが、一応攻撃される恐れも考慮して、門から何歩か下がって立つ。
今から言う内容次第では一方的に敵対行動をとられる恐れもあるため、念のために二人をさらに後ろに下げ、いつでも動けるように注意を促す。
後ろの二人に目で確認をし、頷きが返ってきたところで息を吸い、声を発する直前、門が開き始めた。
出鼻をくじかれた形になってしまい、門が開くのを見守るしかなく、一体どんな人物が出てくるのか気になり、そこに視線が囚われる。

立ち読みサンプル
はここまで

門全体の半分ほど開いたところで、そこにいる人物が確認できた。
中から現れたのは黒髪黒目の彫りの浅い顔立ちの、歳の頃は十を数えるかどうかの幼い少年だった。
住人の誰かの子供だろうか。
衣服は農民が着るような簡素なものだが、汚れが少なく、清潔な印象を与える。
少年をじっと見つめていたため、目が合うとお互い動きが止まってしまう。
相手の目に警戒の色が浮かび始めたため、下がっていた二人を呼び寄せこちらの正体を明かす。
「まずは突然押し掛けた形になったことを詫びよう。我々はヘスニル騎士団の者。任務の最中であり仔細は伏せるが、調査のため森の探索をしていた折に偶然この村を見つけ、立ち寄った次第。すまないがこの村の代表を呼んでもらえないだろうか？　あとは……あぁそうだそうだ、こちらに害意がないことを誓う」
なるべく悪印象を持たれないように、居丈高な言い回しを使わず、頼み込む雰囲気を匂わせる。
エレイアが呆れたように息を吐き、なんとなくだがテオは肩を竦めたような感じがした。
二人が小声でなにか話しているが、なにを言っているのか聞こえずとも大体想像がつく。
大方今の台詞のあらを突いているのだろう。
騎士という身分にある者は侮られないようにするために、こういった場面の定型文があるのだが、普段言いなれない口調に後半でボロを出しつつ少年に語り掛けた。